
悪魔の算数

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の算数

【Nコード】

N 6 6 1 3 F

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

悪魔が出した人類生存の条件。人はそれを実行するのか？

（前書き）

* 問題のある内容で発表をためらうのですが、あくまでお話として
お楽しみください。

神と悪魔の戦いについて決着が付いた。

悪魔が勝利したのだ。

悪魔は全人類に宣言した。

「神は滅びた。おまえたち人間はもはや俺の奴隷だ。まずは七日間、この事実をじっくり噛みしめるがいい」

ほとんどの人はその言葉を信じなかった。そもそも神だの悪魔だのを信じなかったし、神を信じる者は神が滅びたなど頑として信じようとしなかった。

七日後、バチカンに火の玉が落下し、轟音と共に人類最大の神の府が消滅した。

人々はようやく神の死と悪魔の勝利を理解した。

「さて人間諸君。俺はおまえらのような下等な動物は嫌いだ。神はおまえら人間が失敗作だったと認めたがらなかったが、俺がはつきり言ってる、

おまえらは、神の最大の失敗作だ。ハハハハハ。

だから俺はおまえらをこの世界から抹殺することに決めた。

が、

いきなりそう言われてもおまえらも不本意だろう。だから、1度チャンスをやろう。

俺が一つ課題を出す。それをクリアすればおまえらを殺すのはや

めてやる。

俺の課題はこうだ、

これから45日くれてやる。おまえら人類の最後となるかもしれない45日間だ。

45日後の1日間で、国で財産を持っている者を、上から100人、殺せ。

国ごとにたったの100人だ。

それで地球の人類が救われるのだ、実に優しい課題だろう？

世界192の国で100人、たったの1万9200人だ。

たったのそれだけで全世界68億の人間が救われるのだ。

さて、どちらの命が重いか？ 子供でも分かる算数だろう？

驚いたか？悪魔というのは案外優しいものだろう？

金持ちたちよ、世界人類のために尊い命を差し出すがいい。

貧乏人たちよ、生き残るために国一番の金持ちどもを、殺せ。

45日の最後の24時を過ぎたとき、たったの一人でも生き残った金持ちがいたら、

おまえら人類は皆殺しだ。

さあ、

殺せ」

それからの45日間は混乱を極めた。

悪魔の出した条件は最後の1日間で100人を殺せというものだった。

つまり最後の1日で国で100番以内の金持ちでなければよいことになる。

多くの金持ちたちが必死になって自分の財産の順位を探り、各国も凶暴な民衆のデモに促されてトップ100の長者番付を発表した。民衆は直ちに発表された100人を取り囲み、決して逃げられない

ようにした。

金持ちたちは降ってわいたおのが不幸を嘆き、取り囲む民衆に提案した。

「最後の日までまだ間がある。どうだろう？誰かわたしの全財産をもらい受けてくれる者はいないか？」

金持ちにしてみれば命の瀬戸際のあがきだったが、民衆の内には戸惑いが生じた。

そもそも生きるか死ぬかの極貧生活を送ってきた者にしてみれば、たとえあと30日20日10日であっても、国1番の大金持ちとして贅沢三昧が出来るなら、そのあげくに殺されても、貧困に殺される今よりずっと、いいのではないか？、と思わせたのだ。

俺が代わろう、いや俺が代わろうと、民衆の中で争いが生じ、殺し合いに発展し、勝者が思いも寄らぬ莫大な財産を譲り受けることとなった。

彼は贅沢三昧の生活を送り、0の並んだ札束を捨てるように散財していった。

すると、国で十指に入るような超大金持ちならばかまわないが、100番前後の金持ちになると、事情が違ってきた。

100番目の金持ちと101番目の金持ちでは天国と地獄の差がある。

その付近にいる金持ちたちは先を競って金を使いだした。

さて最後に誰が100人の大金持ちとして殺されることになるか、事態は混沌としてきた。

100人の大金持ちと言われてもピンとこない国の人々もいた。
例えば1年中氷に閉ざされた極寒の地の国であったり、年がら年

中裸で暮らす南の小さな島国であったり。

彼らの生活にそもそも神と悪魔の争いなど無関係であったし、そうした文化的な宗教観を持たなかった。

彼らは天に向かって悪魔という存在にお伺いを立てた。

「わたしらは見ての通りに特別の金持ちなんて一人もない生活をしています。100人の財産持ちと言われても、財産はこの暮らす自然の大地であり海であり、これが財産というならわたしらは等しく100人の財産持ちになってしまふ。どうしたらいいのですか？」すると空から石が降ってきて、国の真ん中にドスンと落ちた。石にはこう刻まれていた。

「おまえらなど人間とは認めん」

と。

どうやら結果がどうあれそうした国の「原始的な」生活を送る人々は助かるらしい。

ある国ではさっそく大規模な内戦が起こった。

国の財産を独り占めしている独裁者とその取り巻きが、今さら人類のために己らの命を差し出そうなどとさらさら考えもしなかった。自分が悪魔などという訳の分からない者に殺されるなら、自分以外の人間が、何故、生き残るのか？

おまえらも、死ね。

それが彼と彼らの思想だった。

それまで抑圧に抑圧を重ねて虐げられてきた民衆は、ついに死にものぐるいの反政府運動を開始し、これを軍隊が鎮圧せんと、国土はまさに血に染まった。

死体の山を累々と築き、それでも民衆はついに独裁者の城を占拠し、極悪非道の人非人を捕らえた。

彼は縛り上げられた上、木の棒にくくりつけられ、広場に高々とさらされた。怒りと憎しみを込めて投げつけられる石に、殺してしまわぬよう警備の者が守ってやらねばならぬ有り様だった。

同様に政府高官とその家族がごとく捕らえられ、それまで多くの政治犯が捕らえられ拷問に苦しんできた牢屋に押し込められた。劣悪な環境下、彼らの中には行く末を案じて自ら命を絶つ者もあったが、死体はそのまま捨て置かれた。どうせ国中に無惨な死骸が転がっている。牢屋の中の人数が、100人を下らなければそれでいい。どのみち全員縛り首である。

戦争とは無縁の平和な経済大国でも混乱は起こった。

この国でも「そんな理不尽な」と悪魔に正論で拒否を宣言する金持ちが多く現れた。

彼らは自分の論理がいかに正しいか力説し、金持ち100人の生け贄などという考えがいかに馬鹿馬鹿しいかと理路整然と解説した。国は一見静かで冷静であった。

しかしこの世界の空気を読めない一国内だけの論理は世界中から非難され、金持ちたちは顔色を失った。

しかし自ら命を捧げようという者はほとんどおらず、皆財産を隠し、国外に逃亡し、生け贄の運命から逃れようとした。

ついに日頃羊のようにおとなしい国民性であるこの国でも暴動が起こり、破壊活動が展開された。

暴動の主体はいわゆる負け組と称される低賃金労働者たちだった。この期に及んでまだ身勝手な論理を展開し、卑怯にも逃げ出そうとするセレブリティーたちを狂犬のごとく血眼で探し出し、表に引きずり出した。

阻止しようとする法治国家の番犬たる警察隊、自国警備隊とともに流血の衝突をし、両隊の中から民衆の同調者が現れ、同隊内で戦闘が行われ、ついに政府に対するクーデターが起こった。

100人の金持ちには入らぬ政府高官たちはさつさと政権を投げ出し、野に下った。内心ほっとしている者が多数だった。

かくして、

争乱と騒乱の44日が過ぎ、ついに45日目の夜が明けた。

悪魔は神と並ぶ天の力を持つ者であるから、その45日目はそれぞれの国ごとの24時間が割り当てられていた。

それぞれの国で100人の金持ちの殺害が始まった。

たいていは銃による射殺だった。それが一番苦しめずに死なせてやれる方法だった。

精神的な恐怖に変わりはなかっただろうが。

ロープで縛り首の国もあった。

民衆の中に放たれ、リンチに掛けられてなぶり殺しにあう者もあった。

律儀に一人一人電気椅子にかけた国もあった。

多数が生き残るために少数を犠牲にすることが許されることなのかと倫理観を問う国もあったが、けっきょく算数の問題で、一人一人の命の重さが同じなら、より多くの命を救うべきである、との結論の下、100人の殺害が粛々と行われていった。しかしこうした議論の行われた国では暴力行為は行われず、殺される金持ちたちも自ら名乗り出る者が多く、人々の涙と感謝と謝罪の気持ちに見送られて静かに散っていった。

逆にいざとなったら見苦しく逃げまどい、追いかけ回されて、汚らしくみつともなく殺されていく者の多い国もあった。

地球は回る。

45日目の24時が続々明けていき、時刻に間に合うように各国

で100人が殺されていった。

そして、とうとう最後の一国、最後の100人目が殺されようとして、

この者は、

最後の最後になって逃げ出し、街に紛れた。

彼はちょうど100番目の金持ちだった。それも精査の結果ほんのわずかの差で100番目になってしまった運の悪い金持ちだった。彼は結果を変えないためいっさいの金銭を持たせられずにいたが、服装だけは威厳を持って立派な背広を着ていた。

彼は路地裏で浮浪者の老人を見つけると、「おお、この寒いのに気の毒な。どうぞこの服とあなたの服を交換してください」とままと高級な背広を手放し、大喜びで政府に電話をかけた。

「俺はもう100番目の金持ちじゃあない。100番目は101番目に譲るぜ。ざまあみろ！」

そうして行方をくらませ、101番目の金持ちが繰り上げで殺されることになった。

101番目だった男は泣きわめき、呪いを込めて叫んだ、

「悪魔よ！ 俺の魂をくれてやるから、人間なんて、一人残らず殺してくれ！」

バアン！

24時にギリギリセーフ、最後の国で最後の100人目が殺された。

すべての国で45日目の24時が明けた。

本当にすべての国で100人の財産持ちが殺されたのか？

どこかに間違いやごまかしがなかったか？

自分たちは助かったのだろうか？

それともこれから悪魔に皆殺しにされるのだろうか？

人々は今は亡き神に祈って悪魔の審判を待った。

.....

何も起こらず、

丸1日が経ち、

7日が経った。

どうやら人類は救われたようだ。

人々は安堵すると共に、

怪しんだ。

悪魔なんて、本当にいたんだろうか？

悪魔はいた。

天から下界の人間どもを見下ろして悪魔は言った。

「それ見ろ。だから俺が止めたんだ、洪水を起こして人間を皆殺しにするなんて馬鹿なことをする必要はない、俺に任せれば簡単に人間どもを救ってやるってな」

悪魔が話しかけているのは、神、であった。

「見る。金持ちどもが大金をばらまいて、殺されて国に財産を接収されて、どの国の人間もみんな潤っているじゃねえか？ あの国なんか見てみる、ずいぶんまともになったじゃねえか？ たったの100人。実に簡単な算数の問題だったな。へっへっへっへっへっへっ」

優越感たっぷりな笑う悪魔に、神は実に苦々しい顔で下界を見下

ろした。

神も神なりに悪魔の課題の答えを考えていた。

すべての人間が0であり100であるならば、誰一人殺すことなく悪魔の悪知恵を封じることが出来たのに、

と。

神は思った、

やはり、失敗作だったかと。

おしまい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6613f/>

悪魔の算数

2010年10月28日00時54分発行